

## ウメのクワゴマダラヒトリの粘着剤による被害回避

山本公志

Koshi YAMAMOTO: Control of the mulberry tiger moth, *Spilosoma imparilis*  
Butler (Lepidoptera: Arctiidae) using sticky trap in Japanese apricot

福井県におけるウメ園では、1987年ころからクワゴマダラヒトリが漸次増加し、1988年と1989年には山沿いのウメに多くの被害をもたらした。これは近年ウメの栽培が、山林を伐採して山の中腹から山頂にまで拡大したことが一因と思われる。

従来、本種の多発生年には春期に薬剤を散布しているが、越冬世代幼虫はウメを加害する時期には中令幼虫になっており、薬剤に対してはかなり抵抗力が強いこと、また幼虫は山林などからウメ園へだらだらと侵入し、加害期間も2か月余りにおよぶことから、効率的防除は困難である。

落葉や地表面のくぼみなどで越冬した本種の幼虫はウメの木に登って葉や果実を加害することから、木の幹に粘着剤を噴霧したビニールを巻いてその行動を阻止し、被害を回避する方法を試みたところ、有効であることが明らかになったので、その結果を報告する。

### 試験方法

ウメ(樹令約20年生)の幹の地上1mの高さの部分に、ビニール(幅15cm)の片面に粘着剤(金竜スプレー、昭和電工製)を噴霧し、粘着面を内側にして巻いてから、これをひもで結び、さらにその外面にも十分粘着剤を噴霧した。処理時期は4月10日から6月12日で、粘着剤は適時追加処理した。処理および無処理樹は各1樹である。なお、粘着剤が幼虫の行動を阻止する有効期間を求めため、同一処理樹に4月28日に噴霧した後毎日その効果を観察した。5月10日と18日には木に寄生している幼虫数を調査し、6月12日には収穫後に被害果を調査した。

### 試験結果

1989年には、山林などで越冬したクワゴマダラヒトリの幼虫は3月中旬ころから山沿いのウメ園雑草地へ移動してきた。ウメの発芽初期は3月下旬で、ウメが発芽してしばらく後の4月上旬から幼虫は木に登り、若葉を食害し始めた。その後幼虫の加害は6月中旬までの2か月余りにおよんだ。

処理樹では、幹に登ってきた幼虫は粘着剤の部分から



第1図 粘着剤によるクワゴマダラヒトリ幼虫の行動阻止

上には登れず、引き返した(第1図)。幼虫のいくらかは粘着剤の付着で歩行が困難になり落下したが、粘着部分に付着して死亡する個体はほとんどなかった。

無処理樹では多数の幼虫が寄生して葉や果実を食害し、多くの被害を受けたが、粘着剤処理樹では幼虫の寄生は僅かで、被害果数も極めて少なかった(第1, 2表)。

粘着部分にはノコメトガリキリガの幼虫のほかキリウジガガンボの成虫、ハエ、ハチ類およびその他の昆虫も付着して死亡していた。粘着剤を噴霧後、幼虫の行動を阻止する期間は約20日間であった。粘着剤の有効期間は粘着剤の噴霧量、降水量および他の昆虫の付着量などによって異なると考えられる。今後、有効期間をより長く維持できる方法を検討する必要がある。

粘着剤付着ビニールを幹に巻く際、ビニールと樹皮との

第1表 クワゴマダラヒトリのウメ樹における寄生幼虫数

調査日	粘着剤区	無処理区
5月10日	2	39
5月18日	1	28

第2表 クワゴマダラヒトリによるウメ果実の被害

処理	調査果数	被害果数	被害果率(%)
粘着剤区	70	1	1.4
無処理区	21	16	76.2

調査月日 6月12日

間に隙があると、幼虫はそこから登っていくので、粗皮を少し削ってからビニールを巻き、その上をひもで結ぶと効果的である。枝に支柱がしてあると、幼虫はそこから登っていくので支柱にも粘着剤を処理しなければならない。また、雑草が生育してその先端が粘着剤処理部より上の幹や枝に接すると、幼虫はそれを伝って登ってい

くので、雑草の管理も必要である。

本処理法は、薬剤を使用せずにクワゴマダラヒトリの被害を回避できる有効な一手段であると思われる。また、幹を登ってくるノコメトガリキリガの幼虫の捕殺にも有効である。

(1990年7月5日受領)

---